

# 環境学習施設の つくり方

— 地域に多面的価値を創出する施設 —

## 環境学習施設のそもそも論

大阪産業大学 デザイン工学部 環境理工学科 准教授  
廃棄物資源循環学会 環境学習施設 研究部会 部会長  
花嶋 温子



### 環境学習施設のつくり方 連載2年目

本誌2022年1月号から隔月で始まった「環境学習施設のつくり方」の連載も2年以上を経過しました。【表】に2年目の連載をまとめてみました。通常の連載は奇数月掲載ですが、連載外にも環境学習施設研究部会のメンバーによる関連記事

を掲載してきました。

2022年は、それぞれの施設に着目してそれぞれの活動を紹介してきましたが、2023年は、モノ・ヒト・コトに着目して、多くの施設に共通する工場見学、プログラム、情報発信などの方法を解説しました。また、運営にあたって重要な人材獲得や人材育成についても紹介しました。

これまで多くの環境学習施設の事例を紹介してきましたが、今回は、「環境学習施設、そもそも論」と題して、各事例に共通する根本のところを考えてみます。

### そもそも環境学習とは？

そもそも環境学習とはどんなものなのでしょう。市民啓蒙↓市民啓発↓環境教育↓環境学習↓環境情報提供というように、市民向けの環境教育について、名称も徐々に変わってきました。「啓蒙」という、無知な人を対象に正しいことを教えるという言葉は、使わなくなり、子どもだけでなく大人に対して「環境教育」というのもおこがましいということ、主体を市民側に移して「環境学習」と呼ぶようになりました。さら

【表】「環境学習施設のつくり方」連載内容(9~13回目)

連載回数	内容
9回目 2023年5月号	モノ・ヒト・コトの視点で見る工場見学 工場見学のつくり方
10回目 2023年7月号	モノ・ヒト・コトの視点で見る環境学習プログラム
連載外 2023年8月号	大阪・関西万博TEAM EXPO 2025で「SDGsパビリオン」としてつながる各地の環境学習施設
11回目 2023年9月号	モノ・ヒト・コトの視点で見る環境学習施設の情報発信
12回目 2023年11月号	環境学習施設の人材獲得と人材育成
連載外 2023年11月号	環境学習・環境啓発によって創出される地域の環境拠点
連載外 2023年12月号	環境学習の特効薬「分解ワークショップ」
13回目 2024年1月号	多彩な人とつながりながら現場をみる 研究部会の視察研修会から

にもう一歩引いて「環境情報提供」という表現をすることもあります。ここでは便宜的に「環境学習」と呼んでおきます。何を指すかという点、「主権者が自分たちでライフスタイルを見直して、自分たちの環境を守る自治活動をするための情報を提供すること」だと考えています。

### そもそも環境学習は必要？

近年、地球温暖化や資源の枯渇、

生物多様性の減少が地球規模で問題になってきています。日本での日々の暮らしを見ても、夏が暑くなったり、局所的に大雨が降ったり、明らかに気候変動を感じるようになってきました。この地球温暖化の対策のために日本は、2050年カーボンニュートラル(温室効果ガスの排出量を差し引きゼロにする)を目指しています。私達はこれから暮らしや生産を大きく変えなければいけません。そのことを伝えるために環境学

習の機会が必要となります。もちろん、資源の枯渇と循環型社会の構築も同様に差し迫った課題です。

いくつかの自治体では、地域内の住民のために、単立の「環境学習施設」「環境学習のためだけの施設」を設置しています。しかし、財政状況が厳しい昨今、新たな環境学習施設を建設するより、既存のごみ処理施設にある環境学習施設を拠点として活用しようという動きもあります。

## そもそも何で「ごみ処理施設」に？

ごみ処理に関する啓発の歴史は古く、1930年代にはすでに「ごみ処理の啓発のために「塵芥減量座談会」や「塵芥の利用展覧会」が開催されていました。また、東京市の市政年報には、「清く明るく住みよい都市づくりは、市区当局担当者のみで成し遂げられるものではない。一般市民の協力がなくてはこれを求めることは不可能であり、そのためには清掃思想を普及啓発する必要があります」という記述がありました。90年前のこのような思いは、多くの人に受け入れられ、日本国中に広まってきました。

教育の分野にも同じような動きが

あり、1968年改定1971年施行の学習指導要領(社会科小学校3年)に「市(町、村)の環境衛生、たとえば上下水道、じんあいの処理などの問題について、以前に比べて改善されてきた状態や現在の人々の願いを理解すること」という文言があります。1980年施行の学習指導要領からは、社会科小学校4年生で「廃棄物の処理」について学ぶようになり、それが現在まで続いています。これによって、小学校4年生が地域のごみ処理施設に見学に行くのは、全国的に当たり前の学校行事になっていきます。

このような状況なので、1980年頃に竣工したごみ焼却工場のほとんどに、見学者用の設備が作られるようになりまし。それらが内容を充実させて環境学習施設に進化しました。2010年代以降に竣工したごみ焼却工場のほとんどに、循環型社会・地球温暖化・生物多様性の3点セットの説明があります。ごみの話は、市民にとつてとても身近で、環境問題と自分のライフスタイルを重ねやすい題材です。だから、環境学習がごみ処理施設で行われるのかもしれない。

## そもそもどんな環境学習施設がいい？

それでは、どんな環境学習施設がいい施設なのか？それは、それぞれの自治体が環境学習施設に何を求めているかによります。全ての自治体が同じような環境学習施設を求めているわけではないはず。

環境省が「地域に多面的価値を創出する廃棄物処理施設」と言っているように、ごみ処理以外にさまざまなミッションを持ったごみ処理施設があつてよいのです。

いい環境学習施設とは、何を目指しているのか、ミッションが明らかで、それを追求している施設です。決して、豪華な設備が整っている施設ではありません。

地域の住民や自治体が何を求めているのか分からないまま、「いい感じに市民がたくさん来て、盛り上がるような設備を付けておいて」と発注されても、メーカーも困ります。

ごみ処理施設として、短くても20年ほどの供用期間を見据えると、これから建設する施設は、2050年のカーボンニュートラルも視野に入れて、これからの地域の環境を支える場所になるはず。

また、長期的には、ごみの処理方式も、より環境に負荷の少ない方式に変えていかねばなりません。次のライフスタイルを作り出すことの重要性、そのための知識、他人事ではなく主権者としての自覚を、易しく、押し付けがましくなく伝えるのが、いい環境学習施設かもしれません。

## さて、今年の連載は

今年、それぞれの環境学習施設がミッション(使命)をどのように見出しているか、それを運営に携わる人々や市民の皆さんとどう共有しているかに着目して、3年目の事例探求を進めていきたいと思ひます。これからの1年間もよろしくお願ひいたします。W

### ●連絡先●

環境学習施設研究会

([https://www.facebook.com/facilities.env.edu.888/?locale=ja\\_JP](https://www.facebook.com/facilities.env.edu.888/?locale=ja_JP))

「環境学習施設研究会」で検索すると、(一社)廃棄物資源循環学会環境学習施設研究会のページがでてきます。同部会がfacebookの「環境学習施設を考える会」も運営しています。